



野上清生子全集

第十七卷

岩波書店

野上彌生子全集 第十七卷

第七回配本(全二十三卷)

一九八〇年十二月八日 発行

定価 三三〇〇円

著者 野<sup>の</sup>上<sup>がみ</sup>彌<sup>や</sup>生<sup>え</sup>子<sup>こ</sup>

発行者 緑川 亨

発行所 〒101 東京都千代田区一ツ橋二五五  
鐵岩波書店

電話 〇三二五至四二一  
振替 東京六二六二四〇

印刷・精興社 製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

©野上彌生子 1980

目次

イギリス(続).....	五
ルプランの訪問.....	七
復活祭前後.....	一五
ポートルイスの日.....	二三
ロンドン塔.....	三
博物館のさまざま.....	三八
ロンドンで見た芝居.....	五〇
オランダ.....	六九
オランダの三日.....	七一
道草(ラインに沿って).....	八七
スウィス.....	九三

スウイス断章	.....	五
フランス	.....	一一
パリの印象	.....	一一三
芝居とオペラ	.....	一一三
ヴェルサイユ	.....	一一三
革命祭	.....	一一四
ドイツ	.....	一一六
フランクフルト・アム・マイン	.....	一一六
ハイデルベルヒ	.....	一一七
ミュンヒェン	.....	一一八
汽車中の手記	.....	一一九
サルツブルク	.....	一一九
ヴィーン	.....	一二〇
ハンガリー	.....	一二三

ブダペスト	三三
ドイツ再び	二四七
ドナウに沿うて	二四九
ニュルンベルク	二五五
ベルリン	二六〇
ワイマー	二七六
スペイン	二八九
スペイン日記	二九一
サン・セバスティアンまで(二九一)	
サン・セバスティアン見物(二九五)	
ロヨラ、オニヤ	
ーテ、ビルバオ(三〇〇)	
闘牛(三二五)	
闘牛(三二九)	
ブルゴス、パレンシア、ヴィトリア	
(三三三) 市場(三三九)	
髪結ひ、オベラ、お嬢さん、開戦の噂(三四一)	
マドリド、内乱の	
戦跡(三四四)	
トレド、マドリド、セゴヴィヤ、ヴァヤドリド(三四六)	
ヴァヤドリド、リ	
オハ(三六三)	
落人日記	三六七
四度目のパリ	三六九
ポルドオ	三七六

鹿島丸	三九八
リヴァプール	四〇二
二度目のロンドン	四〇四
戦時議会	四〇七
アメリカ一瞥	四一五
ニュー・ヨーク	四一七
ボストン	四二九
大陸横断	四三六
ロス・アンゼルス	四四六
サン・フランシスコ	四五三
ハワイ	四五八
跋	四六五
後記	四六七

紀  
行  
三





欧米の旅  
下



イギリス(続)



## ルブランの訪問

朝のうち用事で下町へ出かけたTが帰つて来て、午後三時フランスの大統領がヴィクトリア停車場に着くので、だいふ賑やかさうだから行つて見ようといふ話になり、二時前から家を出た。この時刻には割りに空いてゐる地下鉄<sup>チニューッ</sup>がいつもなく満員である。こんな人達も見物に出かけるのであらうかと噂しながらストランドで下りると、これも常にまさる人出であつた。向側の角には、上にRとFの文字を組み合せて大きな国旗が立つてゐる。いつも地下鉄の出口に見いだされる、葦と黄いろい桜草の六片<sup>ベンゾク</sup>花束の花売ばあさんの外に、今日は行列のプログラム売の男たちが、二三間おきに道端に立つて、大きな声で客を呼んでゐる。これも六片。私たちも一つ買つて見ると、最初の馬車が大統領と、キングと、グロスタとケントの両公、第二の馬車がルブラン夫人と、クウィンと、両公夫人。その次ぎが誰と誰でと六台の公式馬車の乗手と順序がわかつた。

イギリス  
トラファルガー・スクウェアをちよつとはひつた広い通の歩道に、私たちは立つことにした。右手には、絵葉書でおなじみのネルソンの高い像が眺められ、左の方には今建て増し中の議会の、これもまた恐ろしく高い方形の足場が、なにか巨人の棲家の角塔の感じで聳えてゐた。見物人はぞろぞろと黒い流になつて続き、路の両側の人の垣根がだんだんに厚くなる。やがてネルソン像の左側のアドミ

ラル・アーチの方から、一隊の兵隊さんが二列縦隊で進んで来ると、士官の号令で銃に剣をつけ、一列は向側に、一列は私たちの側に、三間置きぐらゐに並んだ。芝居の百日鬘をもつと大きくして、卵型に刈りこんだやうな毛帽を眼とすれすれに冠つてゐる。左の耳のあたりと思ふところには白と青の、小さいはたきのやうな飾り毛がつき、顎紐はきらきらした真鍮の鎖である。赤の縦筋の入つた黒いズボンに紫つばい鼠いろの外套、いづれも赤黒いよい血色で、わづかに帽子から外づれてゐる青い眼と、高い鼻と、口許が美しい。それにしてもあの見事な毛帽は何の毛で拵へたものであらう。

この兵士と兵士の間にはお釜帽子のお巡りさんが挟まつた。ロンドンのお巡りさんは身体の大きいのを第一の資格にするさうで、みんなお角力のやうな大男であるが、幸ひに私たちの前には立たなかつた。青い仕事服の男が三人、小さい荷車に砂を載せて来て、シヨベルで路に撒きはじめた。白砂はロンドンでは手に入り悪いのか、オガ屑のやうな茶つばい砂である。後から後からと加はる群集は、向側のホワイトホール・シアタと呼ぶ劇場の、道路から高くなつた石の階段を利用してしようとして路を横ぎる。撒いた茶いろの砂が平気に踏まれるけれど、兵隊さんもお巡りさんも別に咎めはしない。その様子が警戒に當つてゐると云ふより、一緒に見物に来てゐるやうに見える。

少し風が出て、灰いろに曇つた空から雨がばらばら降つて来た。朝は見事なよい天気で、今日こそは雨傘も要るまいと思はれたのにこの雨である。群集を見ると、ちゃんと雨傘を持つてゐる人が多い。どんな日にも雨傘だけは忘られない程、春先きのロンドンの天気は変り易いらしい。これはまた歐洲のこの頃の政治情勢に似てゐないだらうか、と不図そんなことを思ひはじめると、私の眼は知らず知

らず彼方のネルソン像の方を仰ぐのであつた。

まことに彼がトラファルガーの海戦でフランスの海軍にとどめをさしてから、まだ一世紀とはたない。当時の英国にとつてはドイツは大事な味方であつた。それが現在では反対になり、取り分け最近のチェコの事件で、それまでは単に儀礼的に見えたルブランの訪問が、政治上にも重大な意味を加へてゐる際である。あの高い台の上で、サーベルを杖に突き、右手に望遠鏡をもつて佇んでゐるネルソンも、転変極まりなき人の世の姿に今更に驚いてゐることであらう。

三時になつた。お客さまはヴィクトリア駅に着いた筈である。それから十五分たつても、行列の近づいて来る様子は見えない。しかし群集になる程辛抱強さの目だつこの国の人たちは、甚だ落ちつき払つて、その儘夜中まで立たされても平然と動かないでゐるさうな態度で立つてゐる。ただ子供だけは少し待ちくたびれたらしい。向側にゐる四つ位の二人の男の児は、赤と白と青の紙で拵へた小さいサイハイを先刻から振り廻してゐるが、一人はとうとうそれで路を掃いたりしはじめた。後に立つてゐる若い母親は、可愛いいたづらつ児の空色の服のバンドに白い手巾を通し、それを握つて、ちよこ、ちよこ駈け出されるのを防いでゐる。手巾の代りに革紐で、小犬のやうに子供が引つ張られて散歩してゐるのも往来でよく見かける光景である。小犬と云へば、一匹の黒い小犬がその少し先きのところに、どこからもぐり込んで来たかちよこんと坐つてゐる。一人の焦茶の毛皮を着た女が、ハンドバッグからチョコレイトを出してやると、べろりと食べ、後を欲しがつてワンと吠える。女がちよつと極まりの悪さうな顔をして、またハンドバッグを開ける。あたりの人人がみんな微笑する。兵隊さんも



お巡りさんもここにこするところ、甚だ和やかである。しかし話し声をたてるものはない。その間にただ一つ威勢よく響くのは、先刻の子供が振り廻してゐたやうなサイハイを売る男の呼び声である。他に青い、細長い箱のやうなものを差し上げて売り歩いてゐる男があつた。これは簡単な反射鏡で、後になつて見えない連中を目当ての商売であつた。

丁度三時になつた頃から雨がやんで、淡青い空が透いて来た。上手の方には楽隊の音楽がはじまつた。すると前のホワイトホール・シアタの二階から覗いてゐた三人の女たちが、窓を跨いで広い庇の上に出て来た。輝くやうな金髪を房房と襟元まで波を打たせて、わざとらしく帽子を冠つてゐない一番若い女が目だつて美しい。一緒について出た小麦いろの顔をした脊の高い男は、両手をポケットに突つこんで、舞台でも歩いてゐるやうに庇の上を行つたり来たりしてゐる。この劇場では、二三日するとショウの『ドクター・ドレンマ』がかかることになつてゐる。彼らは稽古中の役者たちらしい。その向隣りの銀行の三階では窓を開けず、お茶でも飲みながらといふ寸法らしく、茶卓や、手に取り上げてゐる茶碗などが硝子越しに眺められる。この建物の屋根では煙突の横に長い梯子を掛け、職人らしい男がなにかやつてゐたが、これも梯子の根元にしゃがんで文字通りに高見の見物人になつた。その先隣りの灰いろの大きな家の二階には、薄浅黄いろの縞子地に、金の笹縁を取つた垂幕が、五つ並んだ窓の一つ一つに下つてゐた。また高い軒にはイギリスの国旗とフランスの三色旗の他に、植民地の旗らしい、ピラミッドに椰子のついてゐるものや、藍地に幾つかの星を現はしたものや、獅子を描いたものが掲げられてあつた。